

Morphologic and clinical differences between Early-and Late-onset obsessive-compulsive disorder:Voxel-based Morphometric study

猪狩, 圭介

<https://hdl.handle.net/2324/1866269>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



(別紙様式2)

氏 名	猪狩 圭介				
論 文 名	Morphologic and clinical differences between Early-and Late-onset obsessive-compulsive disorder: Voxel-based Morphometric study				
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	須藤 信行	
	副 査	九州大学	教授	神野 尚三	
	副 査	九州大学	教授	飛松 省三	

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

主論文の主旨

本研究では、脳の形態変化を強迫性障害（OCD）の発症年齢により分類し、健常者と比較検討することを目的とした。OCD 患者 92 例と健康者 146 例を対象に、3T スキャナを用いて脳 MRI 検査を行った。初めにボクセル単位形態計測により、前処理を施した灰白質形態構造画像を用いて両群間で比較した。次に、関心領域（ROI）を設定してそれらの部位の体積を抽出し、18 歳未満発症者 30 名を早期発症者（EO）、18 歳以降発症者 62 名を後期発症者（LO）と定義した。EO、LO、健常者のグループ主効果とし、共変量として年齢、性差、およびこれらとグループとの交互作用を設定し、共分散分析を行った。【結果】VBM 解析と ROI 解析においていずれも OCD 患者では健常者と比べて左側の視床体積が有意に増大していた。また、EO は LO に比べ洞察が乏しく、対称性、ためこみなどの非典型的な強迫症状の重症度が高かった。また健常者と比較し、EO と LO では左視床の体積が大きく、両側側頭葉内側部（海馬、海馬傍回、扁桃体）において年齢とグループの間に交互作用を認めた。LO は EO に比較して加齢性の体積減少を認めた。以上の結果は、視床が強迫性障害の病態形成において重要な役割を果たしていることを示唆している。海馬、海馬傍回、扁桃体は OCD の affective circuit の一部をなすことから、LO はストレスや感情処理の問題が大きく、EO では洞察に乏しく感情的な葛藤が少ないという臨床的特徴を反映しているのかもしれない。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格とした。